

文 化

結を残したと言える。
 A ö ü
 出会いは全くの偶然
 私にはバイオサイバネティクス(生体システム工学)の研究で旧西独のエルランゲン・ニュルンベルク大学に留学した経験があるとはいえ、哲学者のカルシュ博士との間に学問上の接点はない。

松江で日本人の教育に尽くした外国人と言え、アイルランド人のラフカディオ・ハーンが余りにも有名な。だが一九二五年から十四年間、旧制松江高校(現在の島根大学)でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュ博士のことは歴史の谷間に埋もれている。
 カルシュ博士は赤沢正道、高田富之の両氏ら政治家、レーダー開発の功労者である酒井勝郎氏、「長崎の鐘」で知られた医師の永井隆氏ら、後に各界のリーダーとなる人々の青年期に多大な影響を与えた点で、ある意味でハーン以上の業

忘れられた外国人教師の足跡の発掘に魅せられたのは、全く偶然の出会いからだった。昨年九月、ドイツのカールスルーエで開かれたシステム工学の国際会議に参加した折、週末に助手、弟子とシュツットガルトへ出かけた。ホテルで朝食をとっている中、一人の老婦人が私たちの会話を耳をそばだて、にっこりとほほ笑んだ。日本語は全く話せないが、「かつて日本に住んでいた、日本語の響きが懐かしいのだ」といっ

戦中は東京のドイツ大使館に勤め、終戦間際は軽井沢に疎開していたことなど、私たちに話してください。松江とハーンの関係くらいは知っていたから「カルシュ博士にも相当の足跡があるのではないか」と思

が、探求の日々の始まりだった。
 A ö ü
 心温まる師弟の交流
 最初は期待に反し、何の手がかりもなかった。島根大学の図書館で博士の履歴書を発見して初めて、存在の事実を確認できた。そこで、フリーデルさんの姉

を探した。
 いま生きている方々はみな九十歳前後の高齢だ。一様に「素晴らしい先生だった」と振り返り、「今の私があるのはカルシュ先生のおかげ」と涙を流しながら語る様子が胸打たれた。何人かの人を書いた回想には必ず、カルシュ博士のエピソード

を探した。
 それの上達を目指して、週末の散歩へ誘い出した。浜で見つけた石を指し、永井氏や酒井勝郎氏がドイツ語で「何ですか」と尋ねると「ヒムスシュタイン」の答え。生徒たちはその意味がわからず、あれこれ言い下

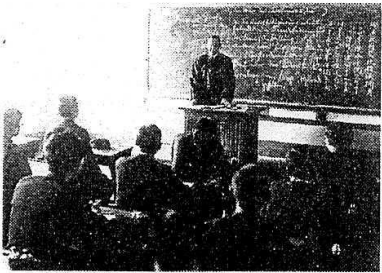
情報をきちんと伝えよう
 と、一心に打ち込んだ姿の記録である。
 A ö ü
 松江へのあこがれ
 松江の住居が火災に遭遇した際、近隣の人々が消火に力を貸し、鎮火後は一鉛筆一本に至るまで盗ま

郷、自分の魂は日本人であり、日本そのものが運命だった。出雲大社で人生のすべてが整理できた」と回想していたという。金婚式を祝った翌年の七一年、博士はカッセルで世を去った。カルシュ博士の日本滞在中、唯一の陰と思えるのは戦争中、大使館付副武官としてナチス政権に仕えた部分だ。しかし、妻がユダヤ系であり、新聞報道でしか母国の状況を知り得なかった境遇をいさげず、仕事をしな

遠来の師今なお追慕

◇ドイツ人教師 カルシュ博士の功績を松江に追って◇

若 松 秀 俊



昭和7年(1932年)、松江でマルクスについて講義するカルシュ先生
 左から右へ、関係のある人、漢字に交換しながら住所録システムと照合し、ゆかりの人々



で米国在住のメヒテルトさんと連絡をとる。関係のある人、漢字に交換しながら住所録システムと照合し、ゆかりの人々
 ドが載っていた。私は長年、自然科学の研究に携わってきたが、調べ物をしながらの心温まるロマンは、初めて味わった。
 例えは永井隆氏はカルシュ先生の温厚な人柄を慕い、ドイツ語と日本語をそれたマルクス主義についての

私の手元には一九三二年、「文乙九期生」を相手にマルクス主義についての講義をするカルシュ博士の写真がある。著名な哲学者ニコライ・ハルトマンの門下生としてドイツ理想主義時代の理性的リアリズムを修め、シュタイナーに傾倒する行動派の人智学者でもあった博士は、学者としてマルクスの唯物論に反対する立場にあった。
 しかも、話の聞き手は十八、九歳の日本の若者。だが、当時の世界を席けんしたマルクス主義についての

晩年には一少年期、まだ見たことのない大山の夢を何度も見た。松江は私の故郷、自分の魂は日本人であり、日本そのものが運命だった。出雲大社で人生のすべてが整理できた」と回想していたという。金婚式を祝った翌年の七一年、博士はカッセルで世を去った。カルシュ博士の日本滞在中、唯一の陰と思えるのは戦争中、大使館付副武官としてナチス政権に仕えた部分だ。しかし、妻がユダヤ系であり、新聞報道でしか母国の状況を知り得なかった境遇をいさげず、仕事をしな

科園科大学教授